

しまなみ浪漫鉄道一九九九

山归来

小さい頃よく遊んでもらったという人も結構いるだろうが、古浜町を海岸伝いに歩き、少し小道に入ったところの寂れた広場に、年老いたSLのじいさんがいる。若い頃はたいそう凜々しい男前だったらしく、逞しい車体で颯爽と貨車や客車を牽いてまわったそうだが、今はこの静かな海近くの広場に引退し、潮風を浴びながら子守をしたり、ときに訪れる目元だけ少年のままのオッサンが、カメラを向けるのに応じたりしている。

汽車や電車というものは、みな線路の上しか走れないものだと思われているが、実はそうでもない。これはここだけの話だが、彼らは夜になると、お月様が敷いた光のレールに乗って、よくそこらへんを散歩している。月の光というのは不思議なもので、それに照らされると見えないものが見えるようになったり、見えるものが見えなくなったりするのだ。人があんまりこれに気づかないのは、お月様の光のせいなのである。

かくいうじいさんも、月明かりの綺麗な夜には、広場を空けてよくぶらりと散歩に出かける。糸崎駅にたむろしている一一五系や一一七系達を相手に昔話をするともあれば、ちよつと遠出をして三原や福山の茶飲み友達のところへ顔を出す事もあった。そこまで行かなくても、海沿いをぶらつきながら仕事上がりの渡船を捕まえて、一緒に月見酒と洒落込んだりもする。まさに悠々自適の毎日というやつだ。

さて、ことの始まりは新尾道駅が出来た頃なので、これも結構前の話になる。この頃は尾道に新幹線が停まる駅が出来るというのでみんな楽しみにしていたが、SLのじいさんも例に漏れず新しい駅の完成を心待ちにしていた。

じいさんはもう引退しているのだから、新しい駅が出来ようが関係ないと思うかもしれないが、決してそんなことはない。後進の若い連中の活躍を見るのは誇らしいものだし、自分が若い頃に旅した土地が今どうなっているかを聞かせてもらうのは、じいさんにとって一番の回春剤なのだ。

だから新尾道駅が完成した時、じいさんは月明かりの晩を待っていていそいそと見物に行った。真新しい駅はピカピカで、まるでお城のようだった。改札ひとつとっても、じいさんの時代とはまるで違う。じいさんはちよつと気後れしたが、新尾道駅に停まる新幹線たちはじいさんをころよく出迎えた。新幹線たちにとっても旅先でその土地々々の話を聞くのは楽しみだったし、それが物知りのじいさんとなれば、願ってもない。そんなわけで、新駅見物に出かけたはずのじいさんは、逆に新幹線たちから昔話をせがまれる羽目になったのだ。

しかし、ここに新幹線たちの誤算があった。実はこのじいさん、ほんの少しばかり、いや、ちよつとかなり、話がくどいのである。何しろ長生きで経験豊かなじいさんだから、その話はいへんになるのだが、これまで生きてきた年月を物語るかのように、長い。普段昔話に付き合っている糸崎駅の連中はこれをよく知っているから、大事なことだけふんふん聞いて、あとはうまーく聞き流すのに慣れている。だが、新幹線たちはじいさんに出会うのは初めてなのだ。最初のうちこそ目をきらきらさせて話を聞いていた彼らも、しだいしだいにまぶたが重くなって行って、お月様が傾きかけた頃にはそろそろ車輪が痺れてきだした。それなのにじいさんの話はまだまだ終わる気配を見せない。じいさんが生まれた昭和十五年頃の日本の様子や出来事を皮切りに、日本が世界と戦争をしていた話、戦場に向かう若者達を乗せたじいさんを大勢の人が見送りにきたこと、そうして送り出した若者達が怪我人や病人となって……時には形も残らず帰ってくるのを、口元をきりりと引き結んだ車掌さんと一緒に出迎えの人々の元へ送ったこと。とにかく話は尽きなかった。

時刻は草木も眠る丑三つ時である。新幹線たちはもうとろとろと、夢の世界に車輪を片っぽ突っ込んでいたが、じいさんはそれに気づく様子もない。話題はじいさんの初恋のことに移っていた。笑ってはいけない。じいさんだって若い頃には燃えるような恋をしたのである。

そのじいさんの初恋というやつだが……これまた随分昔の話になる。じいさんは長年この界隈を走り回っていたが、ごく若い頃には北国でお勤めをしていた。そしてその時、とある街で恋に落ちた。まだ日本が戦争をしていた時分で、やはり月の綺麗な夜のことだった。

月夜の散歩は昔からじいさんの、というよりSLたちにとって何よりの楽しみだった。じいさんもその頃はとにかく若かったから、仕事上がりに僚機たちと誘い合わせて、県境を一つ二つ越えてはいろんな街を見物に出かけていた。今だから言うが、これは若かったから出来たことである。仕事の後に他県へ遊びに行つて、次の日けろりとした顔でまた仕事に戻るなど、とてもではないが今では考えられない。楽隠居で今は仕事をしていないじいさんでも、せいぜいとなり町まで行くのがやつとで、次の日には車輪がぎしぎし痛んだりするのだ。

それはさておき、じいさんの初恋に話を戻すと、それは月夜の散歩中に起こった。仲間たちと立ち寄ったとある駅で、じいさんは一台の淑やかなSLと出逢ったのである。煌々とした月の光の中、スラリとした黒い車体を休める彼女は気品に満ち溢れていて、じいさんは目が離せなくなった。そのうち、彼女も自分に向けられる視線に気づいたのか、じいさんを見つめ返してきて——そして、視線が絡み合った。

「おい、あのご婦人、今おまえのほうを見たぞ」

僚機たちが囁すのに、じいさんは真っ赤になって目をそらした。それが恋のはじまりだったのである。

それからというもの、じいさんは月明かりの晩には必ず彼女のいる駅に向かった。と言っても何をするというわけでもない。遠くから彼女を見つめるだけだった。この頃のじいさんときたら、仲間たちの前では蛮カラを気取っていたくせに恋のこととなると奥手で、好きなご婦人に声の一つもかけられなかったのである。でも彼女はいつだってじいさんの視線に気づいて、控えめながら熱のこもった視線を返してきた。じいさんはそれだけで舞い上がるような心地になったものだ。そうして、視線を交し合うだけの逢瀬がしばらく続いた。……それだけ？　なんて思うかもしれないが、この時代、恋とは忍ぶものだったのである。

だがそんなことも言ってもらえなくなってきた。戦争がどんどん激しくなつて、毎日どこかしらで空襲警報が鳴り響くようになったのだ。人がたくさん死んだ。じいさんの兄弟や僚機も大勢巻き込まれて、火の海に消えていった。みんないい奴ばかりだった。

彼女とも逢えない日々が続いた。休みなく働きながら、じいさんはいつだって彼女のことを想っていた。今夜炎に包まれるのは彼女の町かもしれない。それを思うとじいさんは、ボイラーがぎゅうつと締め付けられるような気がしたが、決してそれを表に出さなかった。一時の感情で、仕事を投げ出して彼女に会いに行くなど男のすることではない。彼女のためにじいさんができること、それは、目の前にある職務をひとつでも多く、忠実にこなすことだった。人を運び、荷物を運び、じいさんが働けば働く程、人も物もめぐりめぐって彼女の助けになる。じいさんはそう信じてわき目も振らず走り続けた。あの時代、じいさんだけでなく、みんながそうしていたのだ。家族や友達や、大切な人を守るために己を捨てて働くこと、それがヤマトだましいとされてきた。でも、無我夢中で走って走って、じいさんが気がついた時には、辺りは瓦礫の山になっていた。戦争は終わっていたのだ。

じいさんは信じられなかったが、呆然としている暇はなかった。じいさんのもとに新しい仕事が次々舞い込んできたからだ。焼け落ちて、何にもなく

なった日本を復興しなければならぬ。じいさんはまた身を粉にして働いた。新しい仕事は、何かに押し迫られているようだった戦争中と違って、なかなか遣り甲斐があった。じいさんは心の中で彼女の姿を思い浮かべながら、日本がもっと豊かで平和になれば、彼女もきっと幸せになれるだろうと考えた。そしてその幸せを作る一端を、自分が担っていくのだと決心した。

その後、彼女とは一度だけ、偶然の中で再会した。じいさんが新しい任地である岡山に出立する時の事で、彼女と言葉を交わしたのはこれが最初で最後となった。折りしも、空には満月が浮かんでいた。

「ご無事で」

「ええ」

じいさんも彼女も、目を伏せたままだった。

「日本もすっかり焼け野原になりましたが、我々で前より賑やかにしましよ
う」

「ええ、きつと」

もどかしいと感じるかもしれないが、あの時代、じいさんにとってこれが精いっぱいのお愛の言葉だったのだ。彼女もそれを知っていた。

「……お達者で」

「ごきげんよう」

こうして二台の機関車は、お互い惹かれる想いを残しながら、別々の線路に乗って遠ざかっていった。どちらも振り返りはしなかった。

それからというもの、じいさんはがむしやらに働いて働いて働きまくった。自分が働くことで日本が復興し、穏やかながら活気のある日々が戻れば、それが彼女の幸せになると信じていた。風の噂によると、彼女はあの町からさらに北の任地へ赴き、その土地の復興につくしたと言うことだ。白銀の世界をしなやかに駆ける貴婦人の噂はじいさんの耳にも届き、彼女の活躍をじいさんはうれしく思っていた。

……と、そこまで聞いたところで、今までうとうととしていた新幹線の一台が「ん？」と車体をかしげた。

「そういえば、そんなご婦人の話を、最近聞いたことがありますよ。どこで聞いたんですしつけ？ ……そうだ、岡山だ」

その言葉に、半分夢の中にいたほかの新幹線たちも目を覚ましました。件の新幹線が話を続けた。

「岡山駅で仲良くなったマリンライナーに聞いたんです。四国の、西条というところに引退したSLのご婦人がいらっしやるって。その機関車は、以前は雪国でお仕事をされてたそうですが、縁あって四国で隠居されているとか。ひよつとしておじいさんの仰るご婦人のことではないですか？」

そう、この新尾道駅が完成した少し後、岡山では瀬戸大橋が開通したのである。今まで行った事のない四国と言う土地に、新し物好きの新幹線が飛びつかないはずはない。岡山・香川間を行き来するマリンライナーたちに土産話をせがんだり、月のレールに乗ってちよいと四国見物に出かけたり。彼らの間で四国ブームが巻き起こっていたのだ。

その話を聞いてじいさんは戸惑った。若い頃の恋の話を、ちよつと美談にして語りすぎたかもしれない。それに、初恋の彼女……かもしれないSLがそんな近くにいたなんて。ぽかんとするじいさんを、他の新幹線たちは好奇心いっぱいの表情でぱつと取り囲んだ。

「わあ、きつとそうですよう。おじいさん、今からでも会いに行きましょう」

「きつとそのご婦人も、おじいさんに会いたがっていますよ」

「なんだったら我々が送っていきますから」

口々にそういう新幹線たちに悪気はない。いや、そろそろ長話から解放されたいという下心もちよつとぐらいあつたかもしれないが、みな親切に、そしてどこか楽しそうに顔を輝かせている。

冗談ではない。じいさんは慌てて新幹線たちから逃げ出した。お月様も

うすっかり傾いて、山の端にかかろうとしている。薄くなりだした光のレー
ルをたどって、じいさんは急いでもとの広場に逃げ帰った。

そう、今更彼女に会いに行くなんて、冗談ではない。だってじいさんはす
っかり年をとってしまった。潮風に吹かれてあちこち錆がきていたし、
塗装も剥げかかっている。それになにより、彼女とはほとんど言葉を交わし
たことがなかったのだ。今更何と言って会いに行けばいいかわからない。若
い頃は視線と視線があっっていれば心が繋がっているような気持ちになれたが、
実際どうだったのだろう。彼女は、じいさんが思うほど、じいさんのことを
想ってくれていただろうか？ まったく、あれから何十年もたつと言うのに、
じいさんは相変わらず奥手なままなのだった。

すっかりふさぎこんで広場に帰り、じいさんは新駅のほうに寄り付かなく
なった。新幹線たちが心配していたと近くを通るバスが教えてくれたが、悪
かったと伝えてもらうようにだけ頼んで、そちらには顔も出さなかった。そ
して、じいさんはまたいつもどおりの静かな暮らしに戻った。

それからさらに十年が経った。じいさんは相変わらずちびっ子達の子守を
したり、野良犬や野良猫に宿を貸したりしながら日々を送っていたが、胸に
ぽかんと満たされない穴が開いたままだった。まったく、知らなければ心穏
やかでいられたのに、海を隔てたお向かいの県に彼女がいると思うと、今は
使うこともなくなったボイラーに、火がついたような心持になるのだ。

ちようどその頃、尾道はまた町全体がお祭のようににぎわっていた。いや、
尾道の町だけではない。向島、因島をはじめとする芸予諸島から、四国の今
治市までが、一体となって盛り上がりを見せていた。新尾道大橋の建設、そ
してしまなみ海道の開通である。広場近くの海を横切る渡船たちが「また仕
事がなくなるわい。そろそろ我らも潮時かね」とぼやいていた。

じいさんはまた、どうしようもなく気持ちちはやるのを感じていた。彼女

のいる四国に道が繋がる。ひと目会いたい。どうしよう、会いに行こうか、いやいや会ってどうするのか、そもそも人違い——もとい機関車違いかもしれない。あの日からさらに十年が経とうと言うのに、じいさんはまだまだ踏ん切りがつかなかった。

そしてとうとうその日がやってきた。風薫る五月のその日、皆がわくわくしながら新しい橋を通って四国へと渡った。四国からもお客様がたくさんやってきた。じいさんは町の喧騒を遠い出来事のように一步引いて見ていたが、日が暮れて辺りが暗くなってから、はっと夜空を仰いだ。

その日はちょうど満月だった。お月様は瀬戸内海をさやかに照らしている。まるで彼女と出会ったあの日みたいに。そして、彼女と別れたあの日みたいに。じいさんは何かに突き動かされたかのように、月の光のレールに乗った。最近散歩もあまりしておらず、体中がぎしぎし鳴ったが気にしなかった。

会えなくてもよい。昔のように遠くから姿だけ垣間見て、息災を見届けてから戻ろう。じいさんは決意を固め、月の光に沿って走り出した。がっしりとした車体を揺らして突き進むその姿は、あの若き日に戻ったかのような。目指すは彼女がいるという西条。尾道からしまなみ海道を経て、今治のすぐお隣である。決して遠くはないが、この年のじいさんには少しきつい距離であった。じいさんはもう、いつ壊れてしまってもおかしくない年になっていた。だから、未練を残す前に、ひと目彼女の姿を目に焼き付けておきたかったのだ。

しかし、結局じいさんはこの日、海を渡りきることはなかった。しまなみ海道のちょうど中ほど、瀬戸田町を抜けるか抜けないかの辺りで、じいさんの動きは止まってしまっていた。なぜかというと——

海の向こうから月の光のレールに乗って、同じようにして近づいてくるS
Lに気づいてしまったからである。それはじいさんと同じぐらいの年の、い
かにも上品な老婦人で、じいさんのよく知っている機関車だった。

あれからもう十年以上が経ち、じいさんもすっかり老朽化して、あぶない
からと子供たちも遊びに来なくなってしまった。だが、じいさんは今でも月
夜の晩になると、あの懐かしい人のところへ昔語りに出かけるそうだ。もし
も月夜の晩にしまなみ海道をあなたが通る時、ひよっとしたら不意に月が雲
に隠れて、じいさんたちの姿が見えることがあるかもしれない。でも、そん
な時は彼らをじろじろ見るようなことをしてはいけない。恋人達の逢瀬を邪
魔するなんて野暮のきわみ……じゃなくて、よそ見運転なんかしたら危ない
に決まっているからだ。